＜資料紹介＞

水子貝塚採集の石器について

齊藤麻那（水子貝塚資料館）

1.はじめに　ここで紹介する資料は 1981 年 9 月 15 日に、市立諏訪小学校に通っていた小学 6 年生から市立考古館（当館の前身）に寄贈を受けたもので、水子貝塚の採集品とされる。

2.石器の概要　大きさは、縦 5.0 ㎝、横 6.7 ㎝、厚さ 1.3 ㎝、重さ 37 ｇであり、石材は黒曜石を使用している。

幅広の剥片を素材としている。整形加工については、打面付近に加工を施し、周縁は粗く剥離がなされ、自然面や主要剥離面を残している（図１）。

この石器はロームの付着がないことなどから縄文時代のものであると考えられる。

3.石器の石材　石材として使用された黒曜石は、透明度は低く、不純物が多くみられることが特徴である(図 2)。東京航業研究所の協力による蛍光Ｘ線分析法での産地同定の結果、神津島恩馳島産の黒曜石であると判定されている。

かつて望月明彦氏により富士見市内出土の黒曜石の原産地分析が行われたことがある（望月 1995)。縄文前期では、打越遺跡で石鏃 2 点（神津島産)、剥片 3 点（和田峠産 1 点、霧ヶ峰産 1 点）が分析された。水子貝塚で、石鏃 3 点（神津島産 2 点、和田峠産 1 点)、石錐片 1 点（霧ヶ峰産)、剥片 7 点（和田峠産 5 点、霧ヶ峰産 1 点、神津島産 1 点）が分析された。点数は合わせて 16 点と少ないものの、どちらの遺跡でも

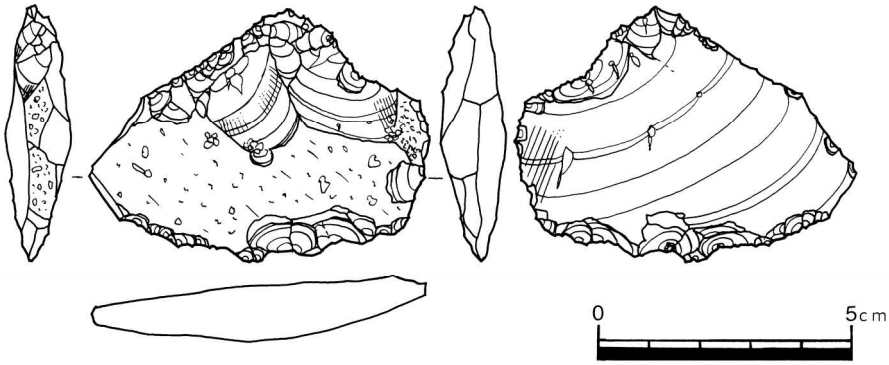

図１　採集石器実測図（S ＝ 2/3）

図２　採集石器写真

神津島産と信州産の黒曜石が使用されており、特に石鏃は神津島産、剥片類は信州産の黒曜石に偏っている。打越遺跡は関山式期、水子貝塚は黒浜式～諸磯 a 式期と、時期は前後するが類似した産地構成となっている。

今回紹介している石器は神津島産であり、石鏃ではないものの、水子貝塚から出土する黒曜石の産地として齟齬はない。

4.水子貝塚出土の石匙　水子貝塚からは、黒浜式期の横型石匙が 3 点出土している。15 号住居からはチャート製の横型石匙(図 3-1)が出土しており、幅広剥片につまみを作り出し、刃部は部分的な縁辺調整のみなされている。16、17 号住居からはチャート製の横型石匙が 1 点ずつ(図 3-2,3)出土している。図 3-2 は、縦長剥片を横向きに用いており、整形加工は打面の除去と刃部形成が中心である。図 3-3 は、横長剥片を素材とし、整形加工は、つまみの作り出しと刃部形成のみである。これらは、整形加工がつまみの作り出しと刃部形成のみであることが特徴としてあげられる。採集された石器とは腹面の刃部加工の有無では異なるが、それ以外の点は同様であるといえる。

水子貝塚は諸磯期の集落跡でもあるが同期の石匙は出土していない。隣市のふじみ野市鷺森(さぎのもり)遺跡では土坑から諸磯期の石匙が多数出土している。つまみを作り出し、石器の周縁を加工し、中央には自然面や主要剥離面を残すものが多くみられる。この整形加工の仕方は、水子貝塚で採集された石器と同様である。

5.まとめ　ここまで、水子貝塚採集の石器について紹介してきた。整形加工がつまみの作り出しと刃部形成程度のものであり、類似するものが水子貝塚から出土している点や、横型の石匙は縄文前期の特徴である点などから、寄贈を受けた石器は縄文前期の石匙の未製品ではないかと推定する。

最後に、黒曜石の原産地同定にあたり東京航業研究所の宅間清公氏・栗原雅基氏にご協力いただきましたことを記し、感謝申し上げます。

主な引用・参考文献

五味一郎 1983「石器Ⅱ：石匙」『縄文文化の研究第 9 巻　縄文人の精神文化』,259-271

笹森健一・川名広文 1986『鷺森遺跡の調査』郷土史料第 33 集, 上福岡市教育委員会

早坂廣人ほか 1995『水子貝塚　史跡整備事業に伴う発掘調査報告書』富士見市文化財報告第 46 集

望月明彦 1995「富士見市内出土黒曜石の産地同定」『水子貝塚　史跡整備事業に伴う発掘調査報告書』富士見市文化財報告第 46 集,212-213

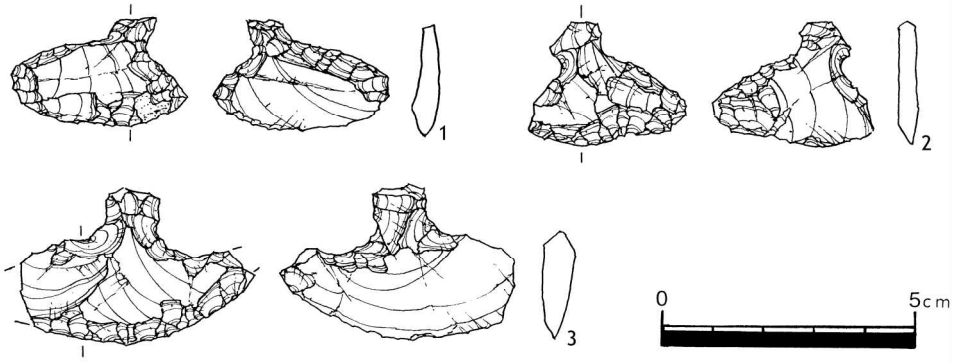

図 3　水子貝塚出土石匙実測図（S = 2/3）